ひと

桜井 隆 さん

Sakurai Takashi

尼崎市・さくらいクリニック院長

1956年兵庫県尼崎市生まれ。81年群馬大卒。兵庫医大内科、阪大整形外科などを経て、92年尼崎市にさくらいクリニック開設。「阪神ホームホスピスを考える会」代表。

「『ぽっくりは幻想』ということを伝えたかった」

「ぽっくり＝大往生」願望の強い日本人に、関西弁で『大往生なんか、せんでもええやん！』と呼びかけた本を昨年5月に上梓した。

「伝えたかったのは『ピンピンコロリ、ぽっくりを願うのは構わないけれど、それは幻想で、実現する可能性は数パーセントにすぎない。だから、そうならなかった時にどうするかも考えましょう』ということです」

しかし、本人いわく反響はいまひとつとか。「ちょっと早かった（笑）。みんな死にとうないんでしょうね」

町の家庭医として外来の延長で在宅ケアを始め、阪神・淡路大震災が起きた1995年頃から看取りに積極的に取り組むようになった。著書には、患者に寄り添う家庭医が看取りまで担う「外来−在宅ミックス型」の診療所がもっと増えてほしいとの思いも込めた。

「患者さんや家族も危機的状態になって初めて医療者に出会うよりも、馴染みの医師や看護師が住み慣れた家にちょこっと来てくれる、という方が気楽かなあと思うんですよ」

右：著書『大往生なんか、せんでもええやん！』（講談社）
左：趣味はバンド。“おっさんロックバンド”「ツインピークス」でキーボードを担当（京都・磔磔でのライブ）

□

外来ではリウマチの専門医として最新のサイトカイン療法などにも力を入れる。宝塚歌劇団の主治医も10年以上務め、週に1回タカラジェンヌたちの様々な相談に乗っている。

常に心がけているのは市民の視点を大事にすること。在宅ケアの醍醐味も、医師が病院・診療所を離れ、“アウェイ”の戦いを強いられるところにあると語る。「患者の家に行くことで見えてくるものが結構あるんです」

2004年に立ち上げた「阪神ホームホスピスを考える会」では、市民も参加する研究会を定期的に開催。文化人類学者から患者・遺族までを含む多職種メンバーで結成した「おかえりなさいプロジェクト」では、当事者に語りかける形で在宅ターミナルケアの情報を提供する冊子『あなたの家にかえろう』を制作し、40万部以上を全国に配布してきた。

「在宅ケアはベッド削減やコスト削減のツールとして語られがちですが、それは問題がある。病院から無理矢理追い出されて家に帰ってきた人を我々も診たくない。在宅の問題は、厚労省やサービス提供者だけでなく、患者や遺族を交えて議論しないといけません」